

しゅんこう／「春の日」は日光をさしますが、「春光」は春の風光。すなわち、春のやわらかい日の光りをいいます。春は空と地中からいち早く動き始めるという通り、光りと影が相まって春を実感させる言葉です。

らしく

自分らしく、
粹なくらし

特集

広島から生まれ育んでいく、人と人とのつながり

お菓子作りを通して、障害のある人の仕事に対する意識や自信を導き出す▼社会福祉法人 交響きつぎ共同作業所
心の復興にむかつて、次の支援へキーワードは「つながり」▼広島市被災者支援ボランティア本部
子どもたちの可能性を引き出して成長を促す▼NPO法人 ひろしまレクリエーション協会

HmI 助成支援団体のご紹介／人材バンク 名人 達人 宝人／ようこそ！公民館へ・安佐北区内公民館
らしくレポート・黄金山さくら会／らしくコラム・人の温もりとともに伝える食文化／情報の森／プラザ通信



広島から生まれ育んでいく、人と人とのつながり



世の中が混沌し、生まれてくる不安な気持ち…。そんな時に必要なのは、人と人とのつながり。今風で言えば「絆」。人は、大きな存在との結びつきが生まれれば、安心感が生まれます。今回は、お菓子作りを通して人と人とのつながりを育む作業所、そして人と人との絆で地域コミュニティを作ろうとしている活動について紹介します。



▲ 安部倫久所長(左)とお菓子班部長丸本哲也さん(右)

お菓子づくりを通して、障害のある人の仕事に対する意識や自信を導き出す

社会福祉法人 交響 きつつき共同作業所

<http://www.koukyou.or.jp/>

個性を持った

お菓子作りへの挑戦

障害者支援施設として、様々な事業に取り組んでいる社会福祉法人交響きつつき共同作業所が、事業のひとつとして行っているのがクッキーやマドレーヌなどのお菓子作りです。

昭和56年に作業所を開所した後、昭和61年から始まった作業所でのお菓子作り。シンプルで、障害のある人にも分かりやすいお菓子作りは食品衛生の資格を取得することで製造ができることから、広島県内の作業所の多くが取り組んでいる事業となっているそうです。



▲ 所長：安部 倫久さん

「大半の事業所が取り組む中で、どれだけ他と違う特色を出しているかが、課題でもありました」ときつつき作業所の所長安部倫久さんはスタート時の思い出についてこう語ります。

意識を変えて取り組むことで作業効率と商品価値の向上へ

きつつき共同作業所では、平成9年に認可施設となった当時、最大5人の職員と障害のある人たちでローテーションを組んで作業に取り組んでいました。丸本哲也さんは、12年前に職員としてお菓子班に所属し、現在はお菓子班の部長を務めています。

2年前に障害のある人も含め仕事に対する考え方を確認し合うなど見直しをしてから意識も変わり、作業効率も向上しました。並行して商品としての価値も上がってきたそうです。

「作業工程をローテーション型から固定型にして、一人一人に合った作業内容や環境を設定。それによって、



▲ 丸本 哲也さん

「NPO法人千羽鶴未来プロジェクト」と共同で開発をはじめました。そのひとつとして千羽鶴から再生した紙を使ったクッキーボックスを作り、その中に共同作業所で焼いたクッキーを入れたHIROSHIMA COOKIESも製造。空箱も、そのままポケットティッシュボックスとして再利用できるアイデアもあり、共同作業所の新しいブランドとしてその存在感を醸し出しています。

さらに、同年11月には中国地方5県の障害のある人たちが作業所や施設で製造したスイーツやスナックの品評会「ひろしまS-1サミット2012」が開催され、共同作業所のある牛田山に見たてて作った、クグロフ型※のスイーツ「きつつき牛田山シヨコラ」が優秀賞を受賞。製造に関わったみなさんは、喜び



▲ 新しいブランドとして期待しているHIROSHIMA COOKIES

HIROSHIMA COOKIESを作ることができたのも、お菓子作りに関わっているスタッフと障害のある人たちの執念だと思っています。同じお菓子でも、市場に出して売るのであれば、共同作業所だからこそできるおいしく意味のあるお菓子を作って届けたい」と安部さん。

「障害のある人たちが取り組んでいる仕事は、正直に言えば生産は低い場合が多いです。なかなか世の中でも評価されていないことが多いのも事実です。そのような状況を改善するためには、おいしく価値ある商品づくりはもちろんのこと、私たちスタッフは障害のある人たちの取り組んでいる仕事を表に出す努力をして、もっと多くの人たちに知ってもらいたいと考えて



▲ 千羽鶴からポケットティッシュボックスとしても再利用できるクッキーボックスを開発

Vol.35 春光号 2013.3

らしく contents

ページ	特集
1	広島から生まれ育んでいく、人と人とのつながり
	……社会福祉法人 交響 きつつき共同作業所
	……広島市被災者支援 ボランティア本部
	……NPO法人 ひろしまレクリエーション協会
5	支援団体のご紹介
	……下向神楽団
	……若&姫の会
	……さんらいず
7	人材バンク 名人 達人 宝人
	……梅田 笑子さん
	……石崎 尚美さん
9	ようこそ! 公民館へ
	……安佐北区内公民館
10	らしくくレポート
	……黄金山さくらの会
	らしくくコラム
	……人の温もりとともに伝える食文化
	広島女学院大学 人間生活学部 管理栄養学科 渡部 佳美 准教授
11	情報の森
15	プラザ通信



表紙写真／HIROSHIMA COOKIESとひろしまS-1サミット2012で優秀賞を受賞したきつつき牛田山シヨコラ

(※)クグロフ型
洋菓子で使われる型。斜めにうねりがあるのが特徴。

レクリエーションを通して人と人との繋がりをより強く。 遊び、楽しむだけでなく、人間関係の形成を

NPO法人ひろしまレクリエーション協会

<http://www.npohiroshimarec.or.jp/>



▲ チャレンジスクールとレク協会のTシャツ

関係は複雑で、子どもたちが見ると、より複雑に見えるのではないかと思います。その中で、大学生が中心に活動が続けられることはこれから社会に出ていく上でも、子どもたちのためにも良いことだと思います。

レクリエーション活動を通して生きる喜びを作り、子どもたちの持つ可能性を引き出して成長を促していくことを目的に昭和51年に結成された広島市レクリエーション協会。その後、平成14年にNPO法人ひろしまレクリエーション協会（以下、市レク協会）へと生まれ変わった後も、レクリエーション活動をテーマに介護や福祉、地域、学校、企業など様々な領域の各種講習会、スキルアップセミナー、資格取得インストラクター養成講座、チャレンジ体験スクールなどを展開しています。

その後、時代の移り代わりと共に企業のレクリエーション活動も減少。合わせて個人で参加するレクリエーション活動も少なくなってきました。しかし市レク協会は、結成当初の理念を忘れずに活動を続けて、関わっている人も当初は100人余りだったのが、現在では19歳から80歳まで1600人余りになったそうです。そして現在は、広島市青少年野外活動センターや広島市内の公共施設などを会場に、レクリエーションインストラクター資格取得を目指している広島市内の大学生、福祉専門学校の学生達も参加して、小学生を対象にしたキャンプやレクリエーション教室を定期的に開催しています。

「参加する小学生と、指導者を

人々とのつながりは、相手と直接会って、触れ合って、紆余曲折がある中で作られていくものです。自分の目線と一緒に遊ぶ子どもにも合わせることが、それまで見えなかったことが色々と見えてくるはずで、ボランティア活動も同じで、ボランティアをしてあげるという気持ちではなく、自分がされる側に立った時にどうしてもらえると嬉しくて、助かるのか。その考えでひとつひとつに取り組めば、地域ボランティア活動に対する意識も変わり、年配者に対する接し方も変わってくるはずで、それをレクリエーション活動の中で培って欲しいですね」と市レク協会副会長の山野節子さんは語ります。

また、市レク協会のもう一つの特

使命感と責任感をもって レクリエーションの 楽しさを伝える

協会結成から40年余り。時代と共に、人々のレクリエーションに対する意識も変わってきましたが、基本理念は変えずに活動を続けている市レク協会。スタッフのみなさんは、これまでのレクリエーション活動に関わったことで作ることができた人と人との関係に感謝し、今まで以上に使命感や責任感をもってレクリエーションの楽しさを伝えていければという思いを持っています。

点を絞り、前向きに生きることを目的に地域や年齢の異なる子どもたちと交流し、その中でコミュニケーション能力を養う取り組みをしています。参加者一人一人が自分で目標や課題を設定。創造力や表現力を育み、常に何でも前向きに取り組んでいける子どもたちになつて欲しいとの願いを込めています」とチャレンジ体験スクール担当理事の奥田祐子さんは語ります。



▲ バンダこと奥田祐子さん

物や形には変えられない、人と人とのむすびつきで支援。 お好み焼きが結ぶ、広島発の復興支援ボランティア

南相馬市仮設住宅「土・日お茶会サロン」（広島市被災者支援ボランティア本部）

【特設ページ】<http://www.a-net.shimin.city.hiroshima.jp/honbu/>



▲ 鈴川千賀子 本部長

平成23年3月に発生した東日本大震災の被災地・被災者を支援するために、広島市社会福祉センター内に開設された広島市被災者支援ボランティア本部は、25団体から構成される「広島市災害ボランティア活動連絡調整会議」が開設したもので、ボランティア希望者や広島への避難者の相談窓口になっています。この本部が現在、継続的に被災地にボランティアを送り出している活動が、平成23年9月から始まった南相馬市仮設住宅「土・日お茶会サロン」です。

「私は広島市社会福祉協議会の職員ですが、職員派遣で実際に4月に被災地宮城県岩沼市を訪れて現状を見て広島に戻った後、広島市民が一人でも多く被災地に向かいたいと考える、岩沼市や岩手県へ『ボランティアバス』を出しました。その後、南相馬市から広島に避難してきた方たちとの出会いから、現地での片づけ作業を中心としたボランティア活動だけでなく、被災者



▲ 永中憲成さん

「初参加の時、私はお好み焼きの係に専念していましたが、鈴川さんから『せっかくの機会です、被災された皆さんのお話を聴かせていただいては？』と肩を押されて皆さんの話の中に入りました。お年の女性の方に『広島は原爆が落とされたけど、今はどうなの？』と優しく声をかけて頂きました。共につかり生活していきたいですね。まるで南相馬市に親戚ができたみたいです。また、高校生で参加した曾根咲子さんは、『学校の先生にこのボランティア活動の情報を教えてもらい参加することを決めました。南相馬市のことはテレビで情報を知っているくらいでしたが、実際に現地では仮設住宅に暮らすお年寄りの方々と話を必要とされているけど、本当は人々との触れ合いも必要なのでは、と感じるようになったのです。広島に戻った後、曾根さんは学校内でボランティア活動の内容を報告。すぐに友人を誘って、次のボランティア活動への参加を決めたと言います。

「心復興にむかつて次の支援へ
キーワードは『つながり』」

かけて頂きました。その時の私には広島市の被災者の現状を正しくは伝えられませんでした。それから、南相馬市の皆さんに少しでも正しい現状を伝えようと学習して南相馬市を訪問しています」とこの活動に5回参加している永中憲成さんは語ります。



▲ 福原直美さん



▲ 曾根咲子さん

会いにくい中で、 応援メッセージを伝える

平成23年秋のスタート以来、これまでに10回以上行ってきた南相馬市仮設住宅「土・日お茶会サロン」。「これは広島と南相馬市の人たちとのつながりづくりだと思っています。実際に会いに行くことで分かることもあるし、伝わるものもあります。借上げ仮設の方たちにはまだ支援が行き届いていないし、私たちの訪問を受け入れてくださる限り、継続していきたいですね」と今後の活動に向けて鈴川本部長は語ってくれました。



▲ お茶会サロンの様子